

西部型授業の模擬授業研修会

小学校外国語活動 ・ 中学校国語

8月2日（木）に唐津総合庁舎で、3日（金）に武雄総合庁舎で、西部型授業の模擬授業研修会を開催しました。唐津会場には29名、武雄会場には35名の参加者がありました。西部教育事務所の所員が行う小学校外国語活動と中学校国語の模擬授業に参加してもらうことで、「学力向上のための手びき」に示した授業づくりのイメージを共有することができました。

模擬授業のあとの「西部型授業をふまえた本授業の工夫点を考える」というテーマで行ったグループ別演習では、日々の授業づくりを見つめ直す機会となり、これからの授業づくりに生かしていきたいことなどについて、活発な意見交換がなされました。



模擬授業の様子

小学校6年外国語活動

「What did you do in your summer vacation?」



考え合う過程では、「よりよいカードを3枚選択する」、「伝える順番を考える」、「楽しんで伝える」という3つの視点を確認し、ペア同士で相手意識をもって伝え合っていました。

中学校1年国語

「よりよいスピーチを生み出そう 話し手として・聞き手として」



学習の流れを可視化した板書

考える過程では、3人組で役割演技を行わせ、話し手、聞き手、観察者のそれぞれの立場から、感じたことを伝え合いました。聞き手の態度が話し手に与える影響を実感できていました。

参観者からの「声」

ペア活動に目的意識を持たせてあるところなど、他教科にもつながる部分があると感じました。教師が、これを考えさせたい、気付かせたいと、ねらいをもっておくことが必要だと思いました。

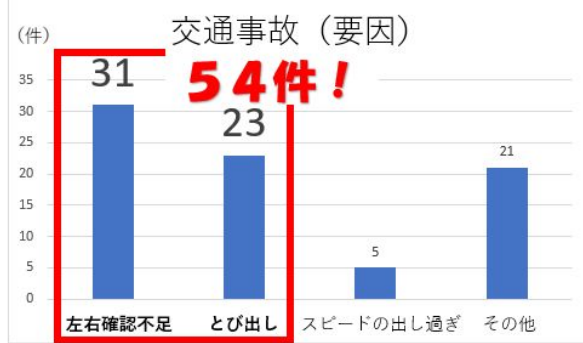
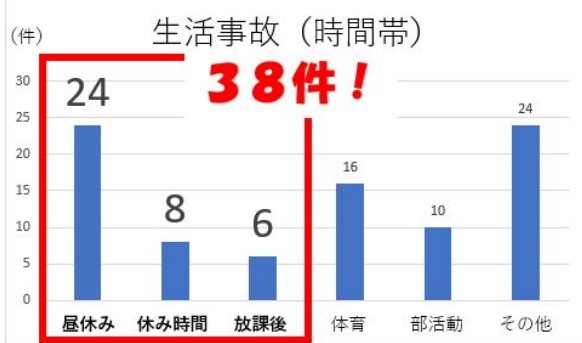
普段の授業では、英語表現の練習、習得で終わっており、考える活動が少ないので参考になりました。カードを使ってゲームで活動させてからの自己表現と、スモールステップを踏み、子ども主体の課程が工夫されていました。

「つかむ過程」で、生徒の既習事項や、自分自身がどれくらいできているのかの確認から入られたように、やはり授業のスタートは生徒なのだ改めて思いました。生徒の対話しながら、めあてをつくっていくことを、まず、2学期はやっていこうと思います。

模擬授業に生徒の立場で授業づくりを見直すことができました。今後は、導入の工夫や、思考をときれさせない学習活動の工夫に重点をおいて、単元を構想したいと思います。

※「学力向上のための手びき」「Q&A」は、西部教育事務所のホームページよりご覧いただけます。

児童生徒の安全・安心を向上させるために！



事故報告の集計から抜粋（H27.4.1～H30.7.31分）

上のグラフは、過去数年間の事故報告データの集計です。この集計の分析から、指導のヒントを探っていきます。

生活事故

時間帯に着目してみます。昼休みや休み時間、放課後で38件となっています。

児童生徒の心が開放的になったり、教師の目が届きにくかったりするため、事故も起こりやすいと考えられます。



ルールや約束を**視覚的に**示す。
ルールや約束の**趣旨を合わせて**説明する。

遊具の使い方を写真にして、示されている学校もあります。



交通事故

要因に着目してみます。左右確認不足やとび出しによるものが54件あります。



「止まる、見る、待つ、**確かめる**」を徹底させることが必要です。



報告では、**横断歩道を青信号で渡っていたのにねられた**ケースが8件ありました。**青信号、横断歩道、運転者を過信しない**ように指導することが重要です。

発達段階に応じて現場で指導したり、運転者からの見え方を説明したりすることが効果的です。



今回は、自立活動の指導の進め方について考えてみました。

Q 肢体不自由の子供の担任です。自立活動の指導に訓練的な内容が入ってもよいのでしょうか？

A 自立活動の指導は、障害による困難の改善・克服を目指すものであるため、場合によっては指導の内容に訓練的な内容(トレーニング)が入ることはあります。しかし、そのような場合であっても、本人が意欲をもち、主体的に取り組むことができれば指導の効果は高まりません。

自立活動の指導に当たっては、①段階を踏み、達成感や成就感を味わわせながら取り組むことができるようにする ②得意なことや好きなことと組み合わせた内容を取り上げる ③単なる訓練ではなく、思考したり判断したりしながら自己選択、自己決定できる内容にする ④取り組める内容が、抱えている困難の改善・克服にどのように役立つのかを理解できるような内容を取り上げるなどが大切です。特に④については、徐々に将来の自立や社会参加に、どのように役立つのかを本人が理解できるような内容を取り上げていき、生涯にわたる主体的な取組を導いていくことが大切です。